

の存在によつて宗教形而上学の領域根拠が明示されるものと考
えられる。アウグスチヌスに於ては次のように言う。

Ergo nolī quare intellegere ut credas, sed crede ut
intellegas (Tract. in Joh. XXIX 6-7) Intellectus enim
merces est fidei Oculs carnis alia videt, se non
potest; intellectus autem et alia intellegit, et seipsum (Ibid.
XI 2-3) これで見れば intellegere と credere との関係が理
解されるのみならず、intellectus は肉体的感性所与以上のもの
であることが知られる。

デカルトの cogito は sum に志向する意味で神を志向する
ものではない。同時にそれは彼の作品が明示する如く感性的所
与からも無縁である。そして人間は une chose qui pense と
いう非人格態の領域に還元されている。人間存在の自我は被に
於ては神からも自然からも断絶されている。かゝる両種の断絶
の間に於て自我は実存として現代取り上げられてはいるが、これ
を再び incarnation の概念によつて啓示宗教の形而上学に設
定するのがマルセルである。かゝる角度からのマルセルが今
回の私の関心事に近いわけである。

阿波の山嶽宗教

西 山 徳

阿波に於ける山嶽宗教の実態調査を行った結果、これが対象

となる次の如き山や滝を知るに至つた。第一に、「のぼり型」
及び小規模のものもあるが「こもり型」を兼ね具へた山として

は、剣山・高越山・大麻山・津の峯・中津峯山・轟滝・大滝山
などであり、第二に、「のぼり型」としては、日峯・大滝山・大川
山・大山中津山などがある。第三に、四国遍路の札所で山嶽宗
教の対象のものあり、又は札所の奥院と呼ばれるものもある。
前者は焼山寺・鶴林寺・太竜寺・雲辺寺、であり、後者は建治
寺・星谷寺・慈眼寺、などである。又同様に琴平の奥院として
の宮城寺などがある。またつり型の山に至つては、余りに多きに
過ぎて、枚挙にいとまがない。第四に雨乞行事の対象となる山
がある。雨乞の滝・雲早山・平家滝・上山などが知られる。

これらに共通する特性をあげると次の通りとなる。第一に、
吉野熊野の信仰の潮流の下にあることである。このことは、藩
政時代以来の檀那帳も各地に多く保存されていること、各地に
義王堂・王子神子の存在すること、先達には必ず大室詣をしてゐ
る歴史的事実及び現状によつて知られる。第二に信者は四十、
五十、六十の各年齢層の者が多い。四国遍路の札所に於ける納
札による信者の年齢層の調査の結果も、同様な統計表を示し
た。第三に登拝者の職業は農業が圧倒的である。第四に登拝の
動機は他人の勧誘によることが多い。第五に信者は、一つの山
だけでなく多くの山に登拝してゐることである。例へば剣山・八
栗山・吉野・石槌山などが多くに共通してゐる。第六に婦人層も
かなり多く、男女の比率は六〇対四〇で、男が多く遍路の統計表
とはほぼ同率である。第七に登拝者の信仰内容は「精神修養」が第

Slu-kyō kashyō vol. 33
no. 3
196

一位を占め、「家内安全」、「感謝」、「健康を祈る」といふ順である。
この中で、珍らしいのは、阿波一宮の奥宮たる大麻山の女子
供すら楽しむお籠り行事と、古き歴史を持ちなが世に知られざ
る高越山と、阿波・土佐両国を信者領域として有する轟滝であ
るので、これらについて、その調査結果を詳述したい。

人間関係主義における不安について

橋 本 武 人

人間関係主義の精神医学、特にH・S・サリバンの対人関係
理論における不安の問題は、パーソナリティの中核としての自
我の形成発達に及ぼすその制約的な作用という点で興味深いも
のがある。精神医学と社会科学との提携を唱えた彼は、G・H
ミードの社会心理学に負うところが多く、人間を自我と他者と
いうダイアデックな場で捉え、その行動の分析から人間をア
カルチュレイションの所産と規定する。

サリバンは人間の行動を満足の追求と安全の追求という二つ
の範疇に分析し、その行動のエネルギーとしての緊張を欲求の
緊張と不安の緊張に大別する。彼は不安の原初的な型を母親の
否認の態度が幼児にもたらす不快感に発見し、この不快感を避
ける欲求、即ち対人的な安全の欲求が生物学的な満足の欲求と
並んで人間が生きて行く上に欠き得ない欲求であることを強調
する。それ故、人間は誕生後間もない時期より対人関係におけ

る安全を得るために各自にとつて重要な意味をもつ他者の承認
否認の態度に従うようになる。これが生物学的な満足の欲求を
社会的文化的に承認されたパターンで充足することを学習する
アカルチュレイションの過程であり、自我の形成される過程な
のである。つまり、自我とは「私の身体」という自己感覺性が
対人的社会的経験によつて人格化されたもので、不安を避けた
り縮小する必要性から生れる教育的経験の組織体ということに
なる。その上、一度形成された自我は不安の経験の故に自己保
存的な性格を持つ。換言すれば、自我は個人が再び不安を経験
しないような方向に発達するのである。

このように不安が自我の形成・発達に際してもつ制約的な作
用を闡明することは、社会的自我の成立過程、人間が社会的存
在として成長する過程をより明確に把握することを助け、よつ
て、人間が自己の内に組織する道徳的規範や宗教的な態度とい
うものを解明する社会心理学的な宗教心理学の一分野で極めて
重要な問題であると考えられよう。

三階仏法におよぼした

維摩経の影響について

橋 本 芳 契

維摩は、浄名居士という在俗者を登場させて、仏教本来の立
場である出世間(一乘乃至三乘)の義を保ちながら、さらに世
間(人天乘)の義をも成就する大乘の根本趣旨を説かせた経で

ある。法華と共にこの経を研究した梁の法雲は、世間・出世間
にわたる四聖教の説をなした。隋の信行(A. D. 510~594)に
よつて創始され、唐宋の間三四百年の繁栄を見た三階宗は「認
悪」の教として、悪魔・外道にも仏教を普及させようとする強
力な実践宗教であつた。教義としては正・像・末の三法三時の
説を根拠とし、ことに正法一乘・像法三乘の第一第二兩階の別
仏別法のときはすでに過ぎ、いま末法たる第三階時には、すべ
て普仏普法によらねばならぬとし、華嚴・法華・涅槃の三經に
維摩經を加えた四經の合様をはかつた上に独自の説を唱へたが
〔開宗は A. D. 587 信行四十七才〕愚者をも師とするという
「謙下の高揚」の論理には、同じく法雲を承けたわが聖徳太子
の三經義疏の意趣に深く合致するものがあり、唐の賢首が「三
階は法雲の流(五教章)としたことの偶然でないのをお知らせる。
信行の主著「三階仏法」対根起行法」をはじめ、「三階仏法密
記」等三階教籍には維摩經を要説として引くことしばしばであ
るが、とくにこの経の往生淨土に関する八法(註①)に言及した
ことは、三階宗における淨土主義の真相究明の手がかりを与える
ものとして注意してよい。中国仏教としては、この宗に仏教の
通規に反するものあつたため終始これを異端視したが、その宗
教による社会改革の根本意図は、かえつてよくわが鎌倉仏教に
よつて相續実現された(註②)ことは世界宗教史にも稀有な事象
として重んずべく、現代のごとき思想混乱期には改めてその意
義を考えるべきであらう。少くとも、維摩經の包蔵する「非道是
仏道」の逆説がかように三階仏法に与えた影響にかんがみ、正法

末の仏教歴史観の持つ宗教哲學的意味が、真正仏法に直接させ
ようとする発菩提心への撃切にあつたことを知り、淨土教の普
遍的真理発揚が現代人への課題たることを理解すべきである。
①菩薩、成就八法、於此世界、行無所住、生淨土。何等為八。
②饒益衆生、而不望報。代一切衆生、受諸苦惱、所作功德、尽以施
之。等心衆生、謙下無礙。於諸菩薩、視之如仏、聞之不疑。不
与声聞、而相違背。不嫉彼供、不高己利、而於其中、調伏其
心。常省己過、不訟彼短。恒以一心、求諸功德。是為八。(香
積仏品第十)
③矢吹慶輝「三階教之研究」(昭和二年)五四四頁。

信仰の伝達エズラの人間の意義

R. J. Hammer

一、序、原始宗教は別としても、宗教と名のつくものは殆ん
ど、所謂指導者、あるいは、神の啓示をうけたと思われる人に
依存している。勿論、信仰の伝達は、その聖典に依存している
ことが多いが、私が今考察しようと思つているのは、信仰の創
始者とその伝達者との関係である。範圍をユダヤ教の場合に限
定し、しかもその意義を示唆することにとどめたい。
二、ユダヤ教におけるエズラの位置
旧約聖書及びユダヤ教の伝承は、ユダヤ人と聖書とを緊密な
関係にもたらしたのはエズラであつたことを語っている。即

ち、これらの中では、彼は特に優れた律法学者、律法を回復
し、それを人々に説明せんとした第二のモーセとして描かれて
いる。

平 井 直 房

ユダヤ教の伝承には、エズラの年代について種々の説があ
り、極めて不正確にしか我々に伝えてくれない。しかし、種々
の伝承を検討する時、これらの伝承は決してエズラの歴史性に
疑問を抱かせるものとしてではなく、エズラがユダヤ教の中に
あつて如何に重要な位置にあつたかを物語っているのであり、
彼エズラの出現によつて、ユダヤ教が新しい時代に到達したの
であることを語っているのを知ることが出来るのである。即
ち、彼はユダヤ教にその中心として律法を与え、彼の体験―ネ
ミヤと共に―によつて、ユダヤ教の存続とその純粹性の保持の
ために、むしろ排他的な色彩をより強くしたのである。それ故
に、エズラの伝達しようとした信仰は、俘囚の時代を通じて預
言者の強調した唯一神教と唯一の眞の宗教でありその信仰であ
つた。しかし彼の伝達したものは、ユダヤ教にその中心を与
え、その結果として排他性をもつていたにも拘らず宗教の本質
としての普遍性を決して失つていなかったものであり、このエズ
ラの立場は次の言葉によつて知りうる。「全ての人を愛せよ。
そは彼等を律法に導かん」。(アポテ一ノ十二)

隠岐における講集團の展開

まず、主要な代参講についてであるが、現在その実数は、不
活潑なものを含め、

	島前	島後	合計
出雲大社敬神講	9	23	32
美保神社 "	1	5	6
美保教会講	22	51	73
一畑薬師講	40	28	68

ではかに伊勢講、黒住講、木野山神社講、大師講等がある。
これらの分布は、島前ではやや均分だが、殊に海士村北部、
美田船越などに濃く、島後では著しく東郷―原田―都方を結
ぶ線以南に集中している。
氏子檀徒の講や民間信仰的講集團も全島に見られるが、その
分布の濃淡は、まだ判然としていない。
江戸時代以前に、これらの講のいくつかが、如何に発生し存
在したかは、明らかでない。西郷四町に伝わる五社大明神神明
講の講帳によれば、文化十五年諸講を一にして八組の講宿を置
いたことが知られる。伊勢講の結成を示す最古の史料でさえ、
安永三年であり、本土との交通が廻船の到来により頻繁化する
文政、天保頃から以降にかけて各地に広まつて行つたらしい。